

館蔵品展「新資料展」出品目録

〔会期：平成29年2月4日(土)～5月7日(日)〕

1 歴史資料

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	寄贈者
1	『賀越能之太守利家公御夜話』上・中・下(写本)	原本：慶長4年(1599)閏3月3日 写：元禄6年(1693)2月上旬	3	—	加賀前田家初代当主・前田利家の言葉を村井長明(勘十郎)が記したものの写本。内容は長明による『垂相公御夜話』とほぼ同一であるが、記述の順序が大きく換わっている	—
2	年未詳九月十日付前田利長書状	年未詳(1601～14)9月10日	1	36.2×56.9	新発見史料。加賀前田家2代当主・前田利長から駒井中務少輔宛ての知行割に関する書状。駒井は慶長6年(1601)に利長に仕え、放生津を拠点に越中の行政を担当していた守勝と思われる	—
3	神保氏張年貢請取状	天正11年(1583)7月26日	1	25.7×13.1	海老坂村(高岡市)肝煎の小四郎(上坂氏)が当時の守山城主・神保氏張に肝煎分173俵を除いた年貢米を蔵に納入した際に差し出したもの。請け取りの証明として氏張が花押を据えている。上坂家文書	—
4	年未詳八月二十三日付横山英盛書状	年未詳(江戸中期前半)8月23日	1	32.9×50.4	加賀八家・横山家5代の左衛門英盛(1658～1704)が東海老坂村五兵衛に宛てた鱸2尾の礼状。元和期(1615～24)頃から東海老坂村が横山家の給人知となっていたため、その密接な関係を示すものといえる。上坂家文書	—
5	御用留(前後欠)	元文期(1736～41)	1	16.1×21.3	作者は上坂氏4代・五兵衛。藩からの各種の達しの写しを中心としているが、中には上坂家の由緒など私的な記録もみられる。上坂家文書	—
6	「定山請証文之事」	明和5年(1768)6月21日	1	24.8×56.8	二上村肝煎から上坂氏4代・五兵衛宛。同村民は同村領内「岡湯用水湯坪」と「土取場」等の二上山中の土地の借地料として、「法花坊田」138.7歩(坪)を五兵衛へ渡すという無期限の土地貸借契約。上坂家文書	—
7	「二上組二塚村変地所勢子年限取極場所見取絵図」	嘉永2年(1849)6月	1	63.0×132.0	現在の高岡市二塚の絵図。水害によって不毛となった土地の復旧を奨励するための補助米を支給する取り決めがなされた場所が記されている。5年・10年・15年の開詰(復旧予定)が色分けされている。青木家文書	—
8	「富山県射水郡二塚村大字二塚村耕地整理施行地区及之二隣接スル土地現形図」	明治後期	1	225.0×100.0	現在の高岡市二塚の縮尺1/1,800の絵図。従来の耕地条件の不備を改め、生産力を高めるために国の補助のもと進められた耕地整理が施行された土地を中心に記されている。青木家文書	—
9	一番新町絵図	正徳4年(1714)4月	1	34.2×425.8	数点現存する一番新町絵図の中で最古のもの。「御改め」(藩の調査)のために作成された	一番新町自治会
10	「富山県高岡市 一番新町実測図」(写)	昭和初期	1	54.5×131.0	図の右側に「昭和通」が記されており、昭和通りが開通した昭和3年(1928)以降の図を写したことがわかる。2枚組のトレーシングペーパー	一番新町自治会
11	「越中国射水郡古府村地引絵図」	明治16年(1883)8月	1	140.0×236.0	明治8年(1875)10月に現在の高岡市伏木古府の地引絵図が作成され、それを元にして作り直された絵図。地引絵図とは地番、区画、地目などを記した絵図のことで、地租改正などに伴い作成された。高野家文書	高野光子氏
12	「新川県下越中国第二十一大区小二区砺波郡八口村秤地図」	明治4～9年(1871～76)	1	80.0×190.0	現在の高岡市八口の絵図で、控えとして作成したものと思われる。黄色で示されている極高新聞とは、部分的な検地により草高を決定した新聞のこと。国谷家文書	石川泰史氏
13	加賀藩試鑄銭	江戸末期	2	5.7×3.6 8.6×5.2	幕末に加賀藩が鑄造した三百文と七百文の試(私)鑄銭(五百文もある)	—
14	銭札「高岡 鍋屋仁右衛門三百文」	江戸後期	1	18.6×4.8	坂下町の綿商・鍋谷仁右衛門が発行した銭札。町人発行の預手形または私造銭札と考えられる	—

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	寄贈者
15	高岡市火葬場へ仏像・仏具 寄付感謝状	昭和3年(1928) 4月11日	1	27.0×39.0	中村せつ氏が火葬場に阿弥陀如来像、三具足、 鑿(台付)を寄贈したことに対し、当時の高岡 市長・南慎一郎から贈られたもの	(匿名希望)
16	『はぎ女句集』	昭和38年(1963) 6月20日	1	14.5×22.0 ×厚1.0	高岡の俳人・沢田はぎ女(初枝・1890～1982)の 句集。池上不二子編	—
17	高岡関係絵葉書	明治40年～昭和 19年(1907～44)	22	—	高岡市内の各所で撮影された写真を使用した絵 葉書	—
18	高岡風景古写真	明治期頃	12	—	高岡・氷見市内の各所で撮影されたモノクロ写 真	室崎信一氏
19	写真「七本杉最後の姿」	昭和2年(1927)	1	—	末広通りにあった神木。同年11月18日伐採の理 由は木の老朽化のため、及び明治31年(1898)に 高岡駅が新設され末広通りが交通の要路になると、 交通妨害を引き起こしたためであった	(高岡市蔵)
20	御神木七本杉 置物台	昭和2年(1927) 以降	1	幅32.4× 奥行19.5× 高3.2	神木・七本杉の用材で作られた置物台。七本杉 の再利用は多く、箸などの小物のほか、大黒天 像(妙国寺蔵)や大仏回廊内の板絵仏画13点な どがある	手崎正之氏
21	「最新版 高岡市内地図」	昭和23年(1948) 8月10日	1	37.9×53.3	縮尺1/50,000の高岡市広域地図と、市中心部・ 伏木地区・新湊地区(現射水市)の地図。裏面 には高岡市の沿革や商店などの広告が、市内の 名所旧跡の写真とともに掲載されている	(匿名希望)

2 民俗資料

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	寄贈者
22	銭湯「朝日湯」資料	昭和期	3	—	白金町で銭湯を営んでいた朝日湯(1927～2014 年)の資料。中将湯温泉ホーロー看板、入湯者 心得(昭和26年)、入浴料(高岡浴場組合)	早川義治氏 早川義一氏
23	谷道文開堂看板資料	大正～昭和期	6	—	小馬出町で文房具店を営んでいた谷道文開堂 (明治28年創業)の看板。ヤマト糊(青貝 塗)、開明墨汁、宣伝用セーラー万年筆など	谷道俊雄氏
24	火鉢	—	2	高29.2× 径44.6 高21.4× 径29.4	共に陶製。灰を入れて炭火をおこし、手足を温 めたり、湯を沸かしたりする暖房具。石油ス トープが登場して以降、衰退していった	菊田明美氏
25	竹に雀文蒔絵見台	昭和40年代以前	1	幅49.2× 奥行35.0× 高51.4	三味線伴奏による語り物音楽である浄瑠璃用の 譜面(床本)台。北野宗治(団昇)氏使用	北野 巖氏
26	宣伝用旗「桜馬場通り振興 会」	昭和20年代前半	1	33.0×44.6	桜馬場通りの店先に掲げられていた宣伝用旗	北野 巖氏
27	写真「桜馬場公園」	明治42年(1909)	1	—	明治に入り、民間に払い下げられそうになっ ていた桜馬場を鳥山敬二郎が買い取り、高岡市に 寄付した。その後、明治35年(1902)公園に指定 された。北陸有数の桜の名所であった	(高岡市蔵)
28	重掛け	昭和期	1	73.4×70.2	婚礼の後、近所や親戚への挨拶回りの際に使用 されるもの。重台、重蒲団、そして赤飯・餅・ 饅頭などが入った重箱を重ねて置き、その上 に豪華な刺繍や家紋の入った重掛けをかけた	手崎純子氏
29	嫁暖簾	昭和50年(1975) 頃	1	171.5×185.0	婚礼の際、花嫁が持参して仏間の入り口に掛 けた暖簾。花嫁はそれをくぐって仏壇参りをし てから結婚式に臨んだ。紋は実家のものを付ける	松木 勇氏
30	氷嚢釣	昭和前期	1	幅39.0× 奥行20.5× 高51.6	氷片や水を入れて患部を冷やすための氷嚢を吊 るす組立式の台。「ホープ氷嚢釣」	本田義郎氏
31	洗濯板	—	1	55.0×23.5 ×厚1.6	たらいの中で洗濯物をこすりつけて汚れを落 とすための板。両面に溝あり。中国がルーツだ が、明治期に欧米から伝わった。昭和30年代に 洗濯機が普及するまで使用された	谷道俊雄氏

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	寄贈者
32	卓上型ラジオ	昭和30年(1955)	1	幅25.3× 奥行13.0× 高17.0	ナショナル製の真空管ラジオ(DL-325)。価格は8,500円であった(当時の小学校教員の初任給は7,800円)	谷道俊雄氏
33	「新版金沢道中双六」	安政4年(1857)頃	1	44.9×65.0	江戸日本橋を振り出しにして、金沢を上がりとする道中双六。画は歌川国芳の門人・歌川芳員。江戸・和泉屋市兵衛版	—
34	「新版 北陸道中巡覧双六」	明治後期頃	1	44.5×67.4	金沢市を振り出しにして、東京府(日本橋)を上がりとする道中双六。金沢・吉岡版	—
35	砺波郡相撲番付	明治19年(1886)4月	1	47.8×34.5	中田神社で開催された地方(草)相撲の番付。旧砺波郡に現在「中田神社」と称する神社は無いが、高岡市中田で最も大きい移田八幡宮のことと思われる	—
36	羽織	明治後～昭和初期	1	丈104.1× 衿61.7× 袖丈63.9	長着の上に羽織る折衿の短衣。明治時代以降に紋付羽織・袴が男子礼装と定められ、一般に広がった。後に女性も羽織を着用したが、正装として打掛があるため、正装にはならなかった	手崎純子氏
37	丹前	昭和前期	1	丈96.2× 衿66.6× 袖丈50.5	着物や寝間着の上に着る防寒用の綿入れ。現在も旅館などで寒期の防寒着として使用される	手崎純子氏
38	長着	明治後～昭和初期	2	—	丈が足首あたりまで長い着物。羽織・半纏・野良着などの丈の短い着物に対して呼ばれる	手崎純子氏
39	子供用着物(四ツ身紋付衿)	昭和前期	1	丈112.7× 衿55.9× 袖丈72.9	七五三などで使用したものと思われる。四ツ身は主に4～12歳頃の子供用の着物のことをいい、並幅の反物から子供の身長4倍の長さの布を取り、それらを縫い合わせて作られる	手崎純子氏
40	日本館ニュース	昭和14年(1939)12月19日	1	19.5×27.1	下川原町にあった映画館・日本館が発行した上映案内	—
41	写真「日本館」	昭和初期	1	—	日本館の前身は有楽キネマという映画館だった	(高岡市蔵)
42	棹秤	大正～昭和初期頃	1	長106.7× 径約3.8	金属製。錘を用いた棒状の計量用の道具。鉤に吊るした計量物と水平になるよう少しずつ錘をずらして、水平になった箇所が目盛りがその計量物の重さになる。錘(秤量120kg)付属	千龍正夫氏
43	手鉤	—	2	—	俵などの積み換えや運搬に使用された道具。木の柄の先に付いた鉤を俵などに引っかけて運んだ。一本鉤と三本鉤(熊手型)	千龍正夫氏
44	引札「越中伏木湊 海陸回漕店 栗田吉左衛門」	明治期	1	25.8×37.5	粟田家は蒸気船で伏木—高岡間の貨客運送業や、日本郵便会社などに参画した	—

3 美術資料

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	寄贈者
45	梅文銀象嵌鍍銅花瓶	昭和45年(1970)	1	高16.1× 径22.4	川原本町の象嵌師・本保桂泉(勇蔵・1910～87)による寿型の花瓶。肩部には桂泉が得意とした銀線象嵌で帯が作られ、内部には卓越した象嵌技法により梅文と笹の葉のような文様がリズムカルに配されている	本保澄雄氏
46	金銀象嵌ループタイ留め具	昭和50年代後半頃	1	4.6×3.6	装飾を兼ねた留め具がついた紐ネクタイ。本保桂泉の巧みな象嵌技術がうかがえる	本保澄雄氏
47	本保桂泉作象嵌花瓶半製品	昭和61～61年(1986～87)頃	2	高23.6× 径9.6 高30.4× 径16.3	半製品とは、製作途中の作品のこと。象嵌の過程がよくわかる、希少な資料である	本保澄雄氏
48	彩漆双鶏草花文手付茶櫃・銘々皿	大正4年(1915)5月	7	[茶櫃]高26.5× 径32.2 [皿]13.4× 13.2	横田町出身の漆芸家・伏間金峰(1891～1976)による手付茶櫃。蓋表に雌雄の鶏と3種の菊が彩漆と蒔絵で、側面にタンポポや菫などの草花が彩漆で描かれている	(匿名希望)

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	寄贈者
49	高岡彫刻塗鯛盆「定塚町校後援会記念」	—	1	幅39.6× 奥行30.3× 高1.8	彫刻塗は、明治30年(1897)に富山県工芸学校校長・納富介次郎(図案)と、教頭・村上九郎作が鯛盆を開発したことから始まったといわれる	—
50	絵変わり蒔絵梅形銘々皿	昭和戦後	6	高5.8×径32.5 [小皿]高2.5 ×径15.7	定塚町出身の漆芸家・山崎立山(1895~1969)による銘々皿。梅形に象られた木地に、高岡漆器独特のうるみ色の漆の素地に花や幾何学模様などが蒔絵や彩漆で描かれている。大皿1枚、小皿5枚	(匿名希望)
51	高岡市民憲章 染付皿	昭和後期	5	高約4.6× 径約31.2	昭和37年(1962)に制定された旧高岡市民憲章と絵が書かれている。皿の制作は京焼の加藤栄山、書は高岡市西田の臨済宗国泰寺派本山62世管長を務めた稲葉心田(1906~86)	—
52	色絵鳳凰図平鉢 古九谷写	昭和22年(1947)以前	1	高4.0× 径33.2	昭和22年の天皇北陸行幸に際し、高岡工芸学校校長兼県工芸試験場長・浅野 廉(1889~1972)が献上のために制作したもの。加賀の窯元へ一ヶ月間泊まり込んで制作したという	柳澤京子氏
53	景岸焼 大黒文中皿	明治3~28年 (1870~95)頃	1	高2.2× 径18.4	福岡町で焼かれていた景岸焼による中皿。創始者・篠田茂三郎(1837~95)は、輸出磁器の製造を思い立ち色絵付の磁器窯を興した。明治11年(1878)にパリ万博で銅賞を受賞するなど活躍したが、篠田の死と共に廃窯となった	—
54	黒田焼 筏井竹の門絵付茶鉢	大正5年(1916)頃	1	高12.8× 口径17.7	高岡の俳人・俳画家の筏井竹の門(1871~1925)による絵付が施された茶鉢。胴から腰にかけて2匹の鹿と、見込に山と月が墨一色で描かれている。黒田焼は高岡市二塚の角 太一(陶風)が始めた	古谷昭史氏
55	竹梅図	大正10年(1921)4月	1	136.2×32.4	筏井竹の門による日本画。印章の「四石」は、竹の門の住居「松杉窟」の庭の四隅に石があったことによる別号	北 正作氏
56	飲中八仙図	江戸後期	1	102.2×35.8	高岡初の町絵師・堀川敬周(1789?~1858)筆。画題は、杜甫の七言古詩「飲中八仙歌」に詠まれた八人の文人で、全員が酒豪でもあった	—
57	高岡産業博覧会 特別ポスター原画	昭和26年(1951)	1	76.8×94.2 ×厚1.1	昭和26年4月5日から5月25日にかけて高岡古城公園にて開催された、高岡産業博覧会の特別ポスターの原画。森戸国次(1904~91)筆	唐木 高氏 大寺桂子氏
58	愛	昭和28年(1953)	1	幅9.5× 奥行9.0× 高27.8	高岡市伏木出身の彫刻家・寺畑助之丞(1892~1970)によるテラコッタ(素焼き)の母子像	(匿名希望)
59	羽衣	—	1	縦32.7× 横26.7× 厚2.0	あわら町出身の彫刻家・畑 正吉(1882~1966)によるブロンズのレリーフ。能「羽衣」のシテ(主人公)・天女が浮き彫りで表現されている	(匿名希望)
60	二行書	明治40年(1907)頃	1	134.8×31.7	第11代高岡市長・早苗西蔵(源淵・1865~1942)による書	新保秀夫氏
61	一行書	江戸後期	1	131.5×31.0	加賀前田家13代当主・前田齊泰(1811~84)の書。「尊開柏葉酒」とあり、「樽を傾けて屠蘇の酒(正月の祝い酒)を酌む」という意味	北 正作氏
62	七絶	明治後~昭和初期	1	137.1×33.2	高岡の政治家・漢詩人・書家の大橋二水(1859~1940)の書。七言絶句(七絶)が三行に書かれている	北 正作氏

※資料はすべて当館蔵。資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。写真・複数資料の寸法は割愛しました。

計 62件123点

(公財) 高岡市民文化振興事業団 高岡市立博物館 (富山県高岡市古城1番5号)

TEL:0766-20-1572 FAX:0766-20-1570 <http://www.e-tmm.info>